

学問としての「事業構想」に向けて

—ことばを手がかりにした試論—

鈴木 洋仁

事業構想大学院大学 准教授

(2018.1.10 受付, 2018.2.1 受理)

要 旨

本稿は、学問としての「事業構想」の確立に向けた試論である。

具体的には、「事業構想」が、ことばとして、どのような成り立ちだと考えられるのかについて、「事業」と「構想」を、それぞれ「事」「業」「構」「想」の4つの漢字、さらには、和語（ひらがな）にまで分解した上で、概念としての「事業構想」が孕む発展性を展望する。

本稿で明らかにしえたのは、「事業」とは、仏教語でありながらも、しかし同時に「西洋の文明」を志向する際の新語としての側面も持っていること、ならびに、「構想」は、creationやimaginationといった、芸術、特に小説における頭の中の動きを示していることの2点である。

また、漢字として見た場合に、「事」は、「こと」として、つまり、概念として捉えがたい性格を持っている。また、「業」は、「ぎょう」のみならず「ごう」や「わざ」といった仏教的かつ、動的な側面を持っている。「構」もまた、「かまえる」の名詞化であった。「想」は、何かそこにはないものに思いを致す際の用語でもある。

かかる試論的な考察からは、次の3つの性質を抽出することができた。

1つは、概念としての新しさ、次に、性質としての「不可視」の側面、そして、「こと」としての動的な側面、の3つである。

こうした「新しさ」「不可視」「こと」という、3つをミックスさせるところに、学問としての「事業構想」の可能性がある。

キーワード：新しさ、不可視、「こと」

1. はじめに

学問としての「事業構想」を論じるにあたっては、文部科学省の大学設置・学校法人審議会とのやりとりにあたった方々や、「事業構想」の実態に即している方々のほうが、ずっと適任だろう（東2012）。

さもなければ、1997年に開学した宮城大学や、多摩大学経営情報学部事業構想学科、新潟市に2006年に開学した事業創造大学院大学の関係者も、学問としての「事業構想」をめぐる議論において適している（宮城大学事業構想学研究会2003）。

さらには、堀池敏男氏による一連の考察もまた、同大学での取り組みを踏まえた形で、「事業構想」の内実を整理

している（堀池2010, 2011, 2015）。

あるいは、「事業構想」の訳語としての、project designとの異同をめぐる議論もありうる。

ただし、本稿で論じるのは、「事業構想」のことばとしての可能性についてであり、上述のいくつかの先行研究とは色合いを異にする。

具体的には、「事業構想」ということばを構成する「事業」と「構想」を、それぞれ「事」「業」「構」「想」の4つの漢字、さらには、和語（ひらがな）にまで分解した上で、概念としての「事業構想」が孕む発展性を展望する。

かかる作業で先行研究として参照しているのは、佐藤健二による論考（佐藤2008, 2014）である。いずれの論考も、「文化資源」あるいは「実業」ということばの概念として

の側面を歴史的にたどりながら、同時に、前者は戦時下の社会空間を、後者は渋沢栄一と福沢諭吉における構想を、それぞれ描き出している。

本稿には、こうした佐藤のアクロバティックな論理展開をそのまま踏襲する見識も力量もない。が、まずは、ことばとしての「事業構想」に着目しながら、学問としての展望を描き出すところまでは論じようと試みる。

2. 熟語としての「事業構想」

「事業構想」とは、「事業」の「構想」にほかならない。

ただし、四字熟語としての「事業構想」は、やや生硬な印象を否めない。そこで、それぞれの二字の単語、つまり「事業」と「構想」が、それぞれ何を意味しているのかを探ってみよう。本節では、この2つのことばについて、辞書的な意味を参照しながら確かめてみたい。

(1) 「事業」とは

近年、「事業」という二字熟語に最も頻繁に接した機会は、おそらくは、2009年秋の「事業仕分け」だろう。

「だろう」という推測にとどまらざるを得ない理由は、この熟語の性格に由来する。なぜなら、この熟語は、きわめて特殊というわけではないものの、しかし、完全な日常用語かと言えば、そうではないからだ。

実際、「事業仕分け」という用語が、時の民主党政権によって打ち出された際、そのことばの意味はほとんど問われなかった。「事業仕分け」それ自体が、一種の「劇場型政治」ないしは、見世物として、特に運輸参議院議員のパフォーマンスとあいまってワイドショーで盛んに報じられた。とはいえ、「事業仕分け」にあたって仕分ける「事業」とは何か、という点については、ほとんど疑義が呈されなかった。

とりわけ、「仕分け」という予算の削減やコストカットの思想そのものについての議論（何をカットすべきかすべきではないか）には、関心が寄せられたものの、「事業」とは、いったい何を意味しているのか、もしくは、何を指しているのか、といった点には、まったく興味・関心が示されなかった。

「事業仕分け」における「事業」とは、多分に「お役所仕事」と揶揄されるような、ムダ遣いと同義であり、ネガティブな色合いの濃いものであった。

そこで、ことばの初出に気を配った辞典として知られる『日本国語大辞典』を参照しよう。

すると、「事業」の欄の1つ目として「しごと、わざ。じごう」とある。そして、初出の用例として、『東寺文書札』が挙げられている。これは、西暦で言えば932年のものであり、「事業伴 是吉」とある。「是吉」という名前の田主に対して、その土地での「事業」＝しごとと権限を付与する

ための文書であったのだろうか。

あるいは、西暦1520年頃、と書かれた『中華若木詩抄』には、「功績は事業也。事業とはしわざ也」との例文を引いている。

いずれも、仏教用語としての性格が強い。実際、『仏教語大辞典』にあたると、次の4つの意味を持つ用語として「事業」は解説されている。(1) 行為、はたらき、行った事柄、(2) 作法。密教の作法。(3) 仕事としていること。職業的な活動。(4) 善悪の行為。善悪の報いを受ける行い。転じて罪業を作ること。この4つである。

本稿では後述するように、これは「事業」のうち「業」を「ごう」と読ませた場合のニュアンスに寄っている。それは、仏教でいう梵語のkarman、いわゆるカルマとしての「業」の考え方をベースにしている。それゆえに、『日本国語大辞典』の用例に明らかのように、10世紀ごろには人口に膾炙していたのであり、仏教用語としては、佐藤健二の論じる「実業」の13世紀前半よりも早く取り入れられている（佐藤 2014：48-49）。

他方で、現在、一般的に使うところの「事業」、つまり、projectやwork、ないしは、businessといった、会社や事業体による経済活動という意味は、『日本国語大辞典』では2つ目に挙げられている。その用例を見てみよう。

最初に引かれているのは、福沢諭吉『文明論之概略』における「千百の事業、並に発生して共に其成長を競ひ」という箇所である。これは、1875年にまとめられたものであり、政治思想史の大家である丸山真男による『「文明論之概略」を読む』（岩波新書）によってもまた、よく知られている。西洋の文明の進んだ点を紹介し、そして、日本がいかなる「文明」を持つべきかを説いた啓蒙書である。

佐藤も、「実業」を考察するにあたって、福沢諭吉が1893年にまとめた『実業論』を参照している。

ここでは、やや迂回する形になるが、佐藤（2014）に倣いつつ、福沢諭吉における「業」の位相を見ながら、「事業」という概念からいくつかの論点を抽出してみたい。

1つ目には、この「事業」という語のポジションである。

『日本国語大辞典』での引用箇所は、『文明論之概略』の巻之一、第1巻の第2章「西洋の文明を目的とする事」の前半部にある。当該部分を、もう少し長く引用してみよう。

戦闘、政治、古学、詩歌等も僅に人事の内の一箇条と為て独り権力を占るを得ず
 千百の事業並に発生して共に其成長を競ひ
 結局は此彼同等平均の有様に止て
 互に相迫り互に相推して
 次第に人の品行を高尚の域に進めざるを得ず
 是に於てから始て智力に全権を執りて文明の進歩を見る可きなり¹⁾

原文は、行替えや句点がない。便宜のために、引用者により一文ごとに行を替えている、という文体に明らかなように、この福沢諭吉の文章自体が、仏教的、あるいは、御経のような連続性を持っている。

文体だけではない。内容面について言っても、仏教的だ。

「事業」が「並に発生」、すなわち、同時に発生し、「其成長を競」う結果として、相互の伯仲ばかりか、相互の推薦が生まれる。そして、次第に「品行が高尚の域に進めざるを得」なくなる、と言う。競争の結果として、優勝劣敗のシステムが形づくられるのではない。そうではなく、反対に、品性を高める結果に「進めざるを得」ない。

この考え方は、多分に仏教的な精神の発露と言えよう。ただし、「事業」のポジションは、この仏教的な考え方の親和性ととどまらない。

2つ目として、この「事業」が、「文明の進歩」に直結している点である。

「事業」の、しかも、「千百」のそれが「並に発生」することは、「文明の進歩」に帰結する、と福沢は言う。あらためて確認するまでもなく、福沢の『文明論之概略』は、『学問のすゝめ』に対しての「文明のすゝめ」とも言うべき啓蒙の書であった。そして、この「事業」が登場するのは、「西洋の文明を目的とする事」と題された章においてであった。だから、「文明」は、もちろん、その中心的なテーマだ。そのテーマに直結するのが、「事業」なのだ、と福沢は位置づけている。

「事業」が同時多発的に生まれることによって、競争だけではなく、相互の推薦が生まれ、そして、品性を高める。そうした仏教的なプロセスを経た上で、結局は、「文明の進歩」という日本がこれから取り組むべき課題への解決策が示される。そのように、福沢は述べている。

「事業」とは、『日本国語大辞典』における1つ目の意味としての仏教的な性格を濃厚に残しながら、同時に、「文明の進歩」という西洋的なテーゼに向けた2つ目の意味にも発展している。

それが、「事業仕分け」というイベントには、ついで問われる機会のなかった「事業」という語の含む可能性ではないか。

(2)「構想」とは

次に問うべき語は、「構想」である。

「構想」についても「事業」と同様、おそらく近年最も頻出したのは、「大阪都構想」という政治的イシューにおいてだろう。

この構想は、大阪府と大阪市の二重行政を解消する、とのスローガンのもと、橋下徹氏が、大阪府知事から大阪市長へと転身してまでも成し遂げようとした課題だ。目玉政策としては、自治体としての「大阪市」を「特別区」に変

更するといった点が挙げられている。より細かくは、本郷亮らによる調査（本郷 2016）などを参照されたいが、この構想は、周知の通り、2015年5月17日に実施された住民投票で否決される。現在でも、大阪維新の会は「大阪都構想」の実現を目指しているとはいえ、喫緊の課題とはいえない。

ここでは、その「大阪都構想」そのものが何であったかについては議論しない。けれども、本稿にとって示唆的なのは、この「大阪都構想」というタームが、「事業仕分け」と似た性格を持っているところにある。その類似点とは、行政に対する不信感であり、「お役所仕事」への嫌悪感である。

現在の行政が進めている「事業」にはムダや「二重」の部分がある。そのため、何らかの「構想」によって事態を打開しなければならない。こういった、焦燥感や義務感や使命感や正義感が緋い交ぜになり、強いリーダーシップを期待する民意に沿う流れの中で、「事業」も「構想」も使われている点で似ている。

ここでもふたたび『日本国語大辞典』を参照してみよう。

用例の筆頭に挙げられているのは、夏目漱石の小説『坑夫』の次のような一文である。

凡て運命が脚色した自然の事実は、人間の構想で作り上げた小説よりも無法則である²⁾。

この一文は、「事業」で例示した福沢諭吉の『文明論之概略』よりも30年ほど時代が下った西暦1908年、明治41年のことである。引用箇所には明らかなように、この部分は、小説の中の一節でありながら、小説論にもなっている。

そして、この用例を掲げているところから、「構想」が、おそらくはplanやimageといった英語やフランス語の翻訳に起源を持つ、明治日本の新語であった様子がうかがえる。

漱石は、本作発表の前年・明治40年に東京帝国大学講師をはじめとする一切の教職を辞し、作家に専念している。その専従作家としての自覚は、同年に出版した「文学論」に明示されている。この『坑夫』もまた、そうした文学論をふまえた上での小説である。

よって、この引用箇所に見られる「構想」とは、多分に、creationやimaginationといった創作における頭の働きや感性の発展を表現している。小説という芸術をつくりだすにあたって、人間の頭の中だけで練り上げたものよりも、「運命」による「自然の事実」の方が、「構想」には収まらないのだと、その事実を漱石は述べている。

こうしたcreationやimaginationとしての「構想」という意味は、『日本国語大辞典』の続く用例にも共通する。

それは、漱石の『坑夫』の9年後に発表された、田山花袋の随筆『東京の三十年』における次の部分である。花袋

は、自らの小説『田舎教師』について、こう述べている。

この作は、『蒲団』などよりも以前に構想したものであるが³⁾

やはり、ここでも漱石と同様の意味を付されている。だから、『日本国語大辞典』では、1つ目の意味として「考えを組み立て、まとめること。特に芸術作品を作るとき、主題・構成・表現形式などについて、組み立てまとめること。また、その考え。構思⁴⁾」とある。このニュアンスに沿っているため、3つ目の用例も堀辰雄の小説『美しい村』の序曲より「一篇の小説を構想したりなんかしてあるんです」という箇所を引いている。

以上の用例において見られるのは、「構想」が、「特に芸術作品を作るとき」に用いられてきたということばの歴史である。しかも、漱石が述べているように、主として頭の中で、つまり、自然や出来事の観察や描写ではなく、creationやimaginationの産物としての「構想」として位置づけている点である。「大阪都構想」におけるplanやpolicyとしての、ザッハリッヒな（即物的な）、現実的なものではなく、「芸術作品を作るとき」の術語として使われてきたのである。

裏を返せば、「大阪都構想」にも、多分に夢物語のような、さもなければ、アートのように、何かを作りあげるような、そんな空気を醸し出していたと捉えられるのかもしれない。

もちろん、繰り返すように、本稿にとって「大阪都構想」という流行語は、「構想」ということばの現在地を確かめるメルクマールにすぎない。

それよりも、ここでは「構想」という用語が、「大阪都構想」のような「二重行政の解消」といった現実の課題を解決する策ではなく、小説を生み出すにあたっての頭の中の働きをあらわすにあたって使われてきた、その歴史的なプロセスに着目したい。

「事業」は、仏教用語と西洋文明、伝統と革新、という、相反する方向を同時に統合するような用語として明治初期にあらわれた。対して「構想」は、明治日本の新語として、主に小説を中心とする芸術における術語としてあらわれた。

「事業」が伝統を引き継ぎつつ、新しい意味を付与された。これに比べて、「構想」は、小説という、これも明治日本にあたって導入された概念と同時に、日本語の世界に取り入れられた。

「事業」と「構想」は、ともに一見すると明治期の翻訳文化によってもたらされた新語であるように見えながら、その実は、ややズレがある。「事業構想」は、こうした2つの用語の組み合わせによってできている。

ここまでは、そのことを確かめてきた。

では、次に、より細かく分類してみよう。その分類とは、

「事業構想」を「事」「業」「構」「想」の4つの漢字に分けることであり、さらには、それぞれを和語（ひらがな）に立ち戻って考え直すことである。

3. 漢字としての「事」「業」「構」「想」

(1) 「こと」としての「事」

「事業構想」の「事」は、「じ」よりも「こと」として読む方が、日本語になじむ。なじむ、と述べるように、日本語における「こと」は、長い歴史を持っている。

ここでも『日本国語大辞典』の用例を引こう。そこで最も頻繁に参照されているのは、万葉集である。

たとえば、「形をもった『もの』に対し、そのものの働きや性質、あるいはそれらの間の関係、また、形のつかみにくい現象などを表わす語」として、「(1) 人のするわざ、行為」、中でも「人の行なう動作、行為を一般的に表現する」ものとして、万葉集における、大伴家持による次の箇所が挙げられている。

我が大君の諸人をいざなひ給ひ 善き事をはじめ給ひて
金かも たしけくあらむと 思ほして 下悩ますに

「われらの大君、つまり、将軍=天皇が、人々をお誘いになり、よい政事をお始めになって 黄金が果たして足りようかとお思いになり、心配になっていたところ」と続いていく。

現代語訳に示したように、ここでの「事」(こと)とは、「政事」を意味している。現在の「政治」よりもやや広い、「政治家」として表象されるような機能的な側面だけではない。「政」(まつりごと)すべてに関わるものとして、ここでの「事」(こと)はある。だから、『日本国語大辞典』では、万葉集から、より政治に近い側面を示した別の用例も引いている。

大君の命かしくみ食す国の許等(こと)取り持ちて

現代語に訳せば、「将軍=天皇の任命のままに、国を治め給う大切な任務を受けて」となるこの箇所での「こと」は、『日本国語大辞典』では、「許等」と書かれている。けれども、言うまでもなく、これは「事」と記載しても構わない。事実、現代語に訳したように、「国を治め給う」、すなわち、天皇が国を統治する、という意味で「事」(こと)を使っている。辞典でも「古くは、特に、公的な行為、たとえば、政務、行事、儀式、刑罰などをさしていう」とある。

佐藤健二は、「実業」という語について、「実業」(じつごう)という仏教語を、先行する存在として「もっと古い、すでに忘れられたといつてよい中世的な意味」(佐藤

2014:48)と定位している。対する「事業」は、「忘れられたとってよい」ほどには忘れられていない。この点は、前章で確かめた通りだ。

なぜか。

その理由は、この「事」(こと)という語にある。

ここに見たように、「事」(こと)という用語は、万葉集の昔から、日本語としてなじんでいる。それも、「政事」に代表されるような、公的な行為について常に使われてきた概念である。このため、「実業」(じつごう)のように仏教用語に限定されて使われるというよりも、多分に「事」(こと)という一般的な名詞において流通してきたのが「事業」という仏教語でありながらも、しかし同時に、近代における「西洋の文明を目的とする」にあたって使われていたのである。

加えて、『日本国語大辞典』の筆頭にくるように、「こと」は、「形をもった『もの』」との対概念、ペアになる概念である。「形のつかみにくい現象などを表わす語」である。「もの」が、目に見える、可視的な、そして、手に取ることのできるような、具体的な存在であるのに対して、「こと」とは、「働きや性質、あるいはそれらの間の関係」をも含めた、不可視の、抽象的な概念を示している。

よって、「実業」で使われている「実」とも、「事」は、また違う。その違いは、「業」という語を見ることによって、より明らかになる。

(2) 「ぎょう」としての「業」

佐藤健二は、明治期に、「実業」が、どのようにして農業や工業や商業を括る「上位語」の位置を占めるにいったか、その変化のメカニズム(佐藤 2014:52)を注視している。そのメカニズムとは、次のようなものだとまとめている。

すなわち「農業」「工業」「商業」のそれぞれの用例が、ようやく明治期において、農夫や職人や商人といった人間を指し示す具象性から離脱し、職業や産業としての類例のある一定の抽象性において指し始めるようになる。それぞれの領域での抽象性をもつ概念としての一般化という変容のうえに、それらを貫く、ある意味での「上位」概念として、新たな「実業」が捉えられていった(佐藤 2014:53)

では、さて、もともとの「業」とは、どのような漢字であり、和語であったのか。

既に何度か述べているように、この語を「ぎょう」と読むのか、もしくは、「ごう」と読むのかによって、違ってくる。

佐藤氏が参照している『広辞苑』によれば、「実業」を「じ

つごう」と読んだとき、それは、「実際に苦楽の果を招くところの善悪の業」という、仏教的な因果応報、輪廻を捉えている(佐藤 2014:49)。対して、「事業」は、すでに見てきたように、単純に「しごと」や「わざ」を意味し、より古い時代から汎用されている。

もっと簡単に言えば、「実業」が「じつぎょう」という新たな読みを付されたのが、明治になってからであるのに対して、「事業」は「じぎょう」として常に使われてきた。だからこそ、明治期になって「西洋の文明を目的にする」にあたって、わざわざ別の読みを加える必要はなかった。

そう考えると、「事業」における「業」は、「ごう」と読むよりも、やはり、もともと「ぎょう」として読まれてきた、その歴史の側面のほうが、より重視するにふさわしい。

また、「業」を「わざ」と読む場合もある。この「わざ」も、それ単体で、「仏事」や「法要」を表すなど、仏教語としての性格を持っている。また、「こと」と同様に、万葉集にも使用が見られており、古くから日本語になじんでいる。

たとえば、「職業」という用語は、「業」(ごう)としての側面もさることながら、この「わざ」、つまり、技能や仕事としての側面から派生した用語として捉えられる。

このように、「業」は、仏教的な「ごう」や「わざ」よりも、「ぎょう」単体としての読みと意味を備えて、これまでの日本語の世界で日常的に使われてきた。そう捉えれば、『日本国語大辞典』にあげられている、「暮らして行くための仕事。なりわい。職業」としての性格をもっていればこそ、「事業」という仏教語でありながらも、新語でもある、その二重性を有することばとしてもまた定着してきた所以が理解できる。

では、「構想」を「構」と「想」にわけるとすれば、この2つには、それぞれどのような意味が含まれているのだろうか。

(3) 「かまえ」としての「構」

既に述べているように「構想」は、明治日本における新語である。それも、creationやimaginationという芸術、それも小説世界における概念を翻訳した新語である。

しかしながら、「構」は、「かまえ」として、短くない歴史を持っている。

「構造」や「構図」、あるいは「構文」や「構築」といった熟語に見られるように、何かをかたちづくるところに、この「構」は使われている。もともとは、「構える」という動詞の連用形を名詞化したものであり、単語というよりも、一連の行為における状態を示している。

それゆえに、辞典の用例としても、『名語記』(1275年)の「鳥獸を懸て、取るかまへなり」が挙げられている。これは「構える」というアクションの中で、ある瞬間を切り

取ったところを「取るかまへ」として抜き出しているさまにほかならない。

こうしたアクションの一場面としての性格は、そのほかの意味、たとえば、「用意、準備、備え」としての「かまへ」にも通底している。辞典が例示しているのは、『源氏物語』の「浮舟」から、次の一節である。

人よりはまめなるとさかしがる人しも、殊に人の思ひ
到るまじき隈あるかまへよ

現代語訳を試みれば、「他人よりも真面目だと、賢ぶる人ほど、世間の人の思いが及ぶまいと思うほどの秘密の工作をしているのだ」となるこの一節における「かまへ」は、「工作」や「計画」、「はかりごと」や「こしらえごと」「工作」を意味している。完結した何かを指し示しているというよりも、現在進行形の、あるいは、そのポイントでの動きを意味している。

こうしたニュアンスをもった日常語として「かまへ」は、日本語の中で位置を占めてきた。

だからこそ、「構」が、「想」という別の文字と組み合わせられて使われることは、明治期になり、小説という新たな西洋文明由来の概念が輸入されるまで、人々には思いも至らなかったに違いない。

では、その「想」とは、いったい、どのような文字であったのか。

(4) 「おもい」としての「想」

白川静の『字通』によれば、この「想」の音は、「相」に由来している、という。そして、「驥思（きし）するありなり」という中国古典・説文に由来することから、それは、「その形容を思いうかべる」ことであり、「その人を慕う意」があるのだと定義している。

つまり、この「想」とは、何か離れたところにいる、あるいは、目の前にいるというよりは、尊敬したり、慕ったりしている、その「想念」を示している。

さらに、この「想」もまた、「事」や「業」と同じく、仏教語としての性格を持っている。

それは、五蘊^{うん}のひとつであり、外界の対象を感受した印象感覚に対して、あくまでも概念として立っていた様子が見て取れる。

加えて、音としての「そう」は、上述のように「相談」や「相思相愛」といった、「相互」の動きをあらわしている。言い換えれば、「そう」とは、主体ひとりの個人的な行動というよりも、どこか遠いところにいる具体的な「相手」を「想定」している時に使われている。主体が、ひとりだけで考えているのではない。反対に、いま、目の前にはいないにもかかわらず、あるいは、いないがゆえに、「その

人を慕う意」を込めている。

これが、「おもい」としての「想」に含まれた意義だ。

だから、「構想」という熟語として、「かまへ」と「おもい」を合わせて使うことは、「想像」の範囲外、あるいは、「想定外」だったと言えるかもしれない。なぜなら、「かまへ」を「おもう」、つまり、「想像する」振る舞いは、日常の中には、見られないからだ。

動きとしての「かまへ」は、あくまでも、遠いところにある何か、ではなく、もっと抽象的な概念である。このため、「かまへ」は、「おもう」よりも前に、「造」（構造）や、「図示する」（構図）方が、より親しみやすい。

このように、「想」という文字の成り立ちからも、「構想」という語が、日本語における近代の産物である様子が窺えよう。

4. 外来語としての「事業」と「構想」

本稿では十分に検討できなかった課題として、外来語としての「事業」と「構想」との関係性をめぐる考察がある。

現在、「事業構想大学院大学」の英語名として、The Graduate School of Project Design が当てられている。しかし、ここまで見てきたように「構想」は、小説用語としての性格が強かった。その点に鑑みると、design という訳語を充当することは、必ずしも最適とは言えないかもしれない。

だからといって、project imagination や project creation という英熟語は、ありえない。だとすれば、逆に、project や design の語源からさかのぼり、その上で、「事業構想」と照らしあわせる作業が必要になろう。

あるいは、「事業構想」という四字熟語をそのまま英訳ないし、日本語以外に置き換えられるのか否かについても、さらなる検討が必要になろう。

5. 学問としての「事業構想」に向けて

ここまですべてを整理しよう。

「事業」とは、仏教語でありながらも、しかし同時に「西洋の文明」を志向する際の新語としての側面も持っていた。また「構想」は、creation や imagination といった、芸術、特に小説における頭の中の動きを示していた。

漢字として見た場合に、「事」は、「こと」として、つまり、概念として捉えがたい性格を持っている。また、「業」は、「ぎょう」のみならず「ごう」や「わざ」といった仏教的かつ、動態的な側面を持っている。「構」もまた、「かまえる」の名詞化であった。「想」は、何かそこにはないものに思いを致す際の用語であった。

こうした分類にてらしたとき、学問としての「事業構想」には、どのような可能性があるのか。

そこには、少なくとも3つの方向性がある。

1つには、新しさである。それは、「事業」が、仏教的な要素伝統を引き継ぎつつ、新しい意味を付与されたこと。そして、「構想」が、小説という、これも明治日本にあたって導入された概念と同時に、日本語の世界に取り入れられたこと。この2点に由来する。

「事業」と「構想」は、ともに一見すると明治期の翻訳文化によってもたらされた新語であるように見えながら、その実は、ややズレがある。「事業構想」は、こうした2つの用語の組み合わせによってできている。

続く、2つ目としては、漢語としての性格に共通する「見えないこと」「不可視」の側面である。「事業構想」学が、確固とした学問分野として確立しているとは言いがたい、もしくは、確立していないと断言できる以上、この帰結は示唆的だ。

あいまいな漢語4つの組み合わせだから、「事業構想」もまたあいまいになる、というわけではない。そうではなく、アクション、プロセス、動的な動きとしての「事業構想」を示唆している。「事業構想」が、固まった概念としてあるわけではない。しかも、仏教的な側面を持ちながら、新たな思考を可能にする。それが「事業構想」だという示唆である。

最後の3つ目としては、「こと」としての側面である。それは、言い換えれば、「もの」という固まったものではなく、「こと」的な可塑性をもった、変化する、変容する可能性にはかならない。それは、ここまで述べてきた和語、ひらがなとしての側面に着目すれば明らかだ。

以上の「新しさ」「見えないこと」「こと」としての側面、その3つをミックスさせるところに、学問としての「事業構想」の可能性がある。

では、具体的に、こういった学問分野としての発展性を持っているのか。

そうした点については、別途、機会を改めて考察したい。

注

- 1) 引用は、以降全て、国立国会図書館デジタルコレクション『福沢全集』第4巻（強調は引用者による）。
- 2) 強調は引用者による。
- 3) 強調は引用者による。
- 4) 強調は引用者による。

文献

- 東英弥 2012「事業構想が基本だ 次代の産業を担う「起業家」を創り出す」『Themis21』(7), 70-71.
- 白川静 (1996=2014)『字通』平凡社, デジタルアーカイブJapan Knowledge+版.
- 福沢諭吉 1875→1925『文明論之概略』引用は、国立国会図書館デジタルコレクション『福沢全集』第4巻 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/979054/19?viewMode=#>による。(最終アクセス日 2018年1月11日)
- 本郷亮 2016「特集 大阪都構想」『エコノフォーラム21』関西学院大学, 4-5.
- 堀池敏男 2010「事業構想に関する一考察」『京都学園大学経営学部論集』20(1), 27-47.
- 2011「中小企業と事業構想」『京都学園大学経営学部論集』21(1), 103-122.
- 2015「事業構想と事業戦略」『京都学園大学経営学部論集』24(2), 1-26.
- 宮城大学事業構想学研究会 2003『事業構想学入門』学文社.
- 佐藤健二 2008「文化資源学の構想と公共性の構築」『科学研究費成果報告書 ジェンダー、福祉、環境、および多元主義に関する公共性の社会的総合研究』(研究代表者・上野千鶴子) 222-243.
- 2014「近代日本における「実業」の位相——渋沢栄一を中心に」平井雄一郎・高田知和編『記憶と記録のなかの渋沢栄一』法政大学出版局, 47-73.

Toward Establishing Project Design as an Academic Discipline

Hirohito Suzuki

Abstract

This paper provides a tentative assumption regarding project design as an academic discipline.

In order to take a long view of this concept, we focus on constructing project design. Specifically, this paper analyzes the two words project and design, then decomposes project design as a sequence of four Kanji (Chinese characters), and as a *hiragana*.

Consequently, a project not only has a meaning stemming from Buddhism. It also provides a simultaneous corollary word that is imported from occidental civilization. Moreover, design designates the process of creation and imagination in the mind.

As a Chinese character touching on project design, we extract the Buddhist and dynamic aspect of the concept.

Throughout the effort of dealing with this assumption, we conclude that three aspects characterize project design as an academic discipline.

First, the newness of the concept; second, its invisibility; and third, its dynamism.

The possibility of project design becoming an academic discipline is based on the mixture of these three elements.

Keywords: newness, invisibility, dynamic aspect